

I 放牧による肥育素牛の低コスト育成技術の開発

(特定農産物技術開発事業)

北上山地の放牧利用による双子生産ならびに交雑種の生産技術の開発

目 次

- 第1章. 緒論
- 第2章. 日本短角種および交雑種を利用した放牧による双子の哺育育成
- 第3章. 交雑種 (F₁およびF₁クロス) の放牧適性及び哺育能力
- 第4章. 交雑種雌牛の二産取り肥育の産肉性
- 第5章. 牧草地・野草地・林地の組み合わせ利用技術と家畜の生産性

第1章. 緒 論

我国の農業を取り巻く情勢は国際化の進展により厳しさを増し、輸入自由化が決定した牛肉、オレンジ、パイナップル等の特定農産物については、地域農業の根幹をゆるがす問題となっている。

これら問題を解消し、地域農業の振興を図るため、特定農産物の対外競争力を緊急に強化する必要に迫られた。

そこで、農林水産省草地試験場を中心として、東北農業試験場、北海道新得畜産試験場、岩手県畜産試験場、宮城県畜産試験場、広島県畜産試験場、大分県畜産試験場が共同し、肉用牛の子牛生産で主要な経費となっている飼料費と労働費等のコストダウンを図るため、公共育成牧場、林地、裏山等をフル活用し、安くて良質な粗飼料を省力的に利用し得る放牧の取り組み、また双胎牛による母子放牧技術、交雑雌牛の泌乳性を利用した子牛の放牧育成技術等を確立するため、「放牧による肥育素牛の低コスト育成

技術の開発」の課題について検討した。

牛肉の輸入自由化を目前にした1988年（昭和63年）の本県の肉用牛の飼養戸数は県内農家の1/4にあたる2万8千余戸、頭数は15万頭を数え水田地帯の繁殖飼養を中心としながらも、北上、奥羽山系の豊富な草資源に支えられ農業の基幹作物として発展していた。

このような中で牛肉の輸入自由化は国内で生産販売される牛肉の価格を不透明とし、子牛の取引価格にも変動がみられると思われ、本県基幹産業の存亡に関わる事態の発生が懸念された。このことから、肉用子牛価格安定等の行政的措置とあわせて、牛肉生産費に占める素畜費、飼料費等の大幅なコストダウンが緊急の課題であった。

そこで、開発されつつある受精卵移植技術などによって生産された双子の放牧育成技術、ならびに放牧に最適な日本短角種、及び乳用種に黒毛和種を交配し、雑種強勢効果を活用した、交雑種の効率的な放牧育成技術、また放牧育成した交雑種雌牛の産肉性についても検討した。

一方、一層の低コスト化を図るため、牧草地、野草地、林地の組み合わせ利用による植生の遷移と放牧延長の可能性についても検討した。